

第6回羽島市新しい時代の学校構想検討委員会 会議要旨

日 時	令和6年2月13日（火） 9時30分～11時10分
場 所	羽島市役所本庁舎 4階 第1委員会室
出席者	<p>【委員】 棚野委員長、松本副委員長、児山委員、石原委員、長島委員、松下委員、田中委員、浅野委員、新井委員、長谷委員、木下委員、太田委員</p> <p>【事務局】 森教育長、今井田事務局長、小川教育政策課長、山田同課長補佐、岡田同課政策係長、高橋学校教育課長、岩田生涯学習課長、横山教育政策・学校支援専門員</p> <p>【参観】 教育委員会委員：2名</p> <p>【傍聴】 傍聴者：4名</p>
内 容	<p>1 開会 2 前回議事録の確認 3 議事（議事進行を委員長に依頼）</p> <p>(1) 今後のスケジュール（案） 事務局から資料を用いて説明を行う。 質問・意見ともになし。</p> <p>(2) 羽島市の新たな学校像 事務局から資料を用いて説明を行う。</p> <p>【委員】 前回資料のアンケート結果によると保護者や地域の方は、学習内容や活動場所の選択肢や多様性を求めている。新しい時代を見据えた学校改革において大切なのは、自由学習や個別最適化された学びの具体を考え進めることである。そのためにも、保護者や子どもたちに「選択肢」を示すことが大切である。</p> <p>例えば、事務局から説明があった「学校選択制」や「特例校制度」等について、保護者や地域の方に情報提供できるとよい。そのうえで子どもたちや保護者が選べる仕組みになるとよい。学校の特色からどこに通うかを主体的に選択できることが新しい時代における学校の理想である。</p> <p>一方、懸念するのは、学校間の特色の出し方である。それぞれの学校がより強い特色を出すことで、羽島市全体の教育の質は向上するはずであるが、特色を色濃く出そうとすることで教員の負担増にならないか心配である。</p> <p>課題や懸念材料はあるが、一人一人の多様性を認められるような新しい時代の学校像をイメージしたとき、あらゆる人が主体的に自分のあり方やスタンスを選べるような教育の方向性が大事になる。</p> <p>【委員】 「選べる」という点でいえば、羽島市にある保育園は特色や保育方針を踏まえて自由に選ぶことができる。羽島市の保育園は、それだけ特色があり質の高い保育を行っている。</p>

【委員】

一大学園都市のようなものを羽島市につくってはどうか。送迎バスを整備することで、どこの地域からでも保護者や本人が希望した学校に通うことができる。学校施設を複合化することで、地域の方の声を聞くことができるし、学校間あるいは、先生たち同士の交流や情報共有も簡単に行うことができる。送迎バスによって雇用促進にもつながる。

10年、20年先に子どもたちが通いやすい、子どもたちのためになる学校を考えたとき、学園都市構想はメリットが大きい。

【委員】

義務教育として、羽島市がどのような方向で、どのような教育をしていくかを話し合う必要がある。一方で働き方改革が話題になっており、特色を出すことが先生の負担になってはいけない。

「願う姿①」と「願う姿②」とあるが、いずれも素晴らしい。

【委員】

学校や地域により「特色」は異なる。ここに示された「願う姿」はいくつかあるが、自分の地域、小学校区、中学校区でいうと、特に「願う姿」の〇〇を大切にしたい教育や方向性が必要であるという話し合いをするとよい。

例えばアンケートの結果を見ると、最初のページに、「我が子に身につけさせたいこれから社会人に必要だと思う力」という質問がある。全体的には、「ア」の相手の思いや考えを理解し、話を聴く力が72.9%で一番多い。しかし、桑原学園校区の結果は、「ウ」の情報を正しく理解し、活用する力が最も多くなっている。

また、桑原学園校区では、他の中学校区に比べて、「エ」の目標に向かって仲間と協力し、活動する力が高い。

さらに「カ」のボランティアや奉仕活動に参加するという質問では、他の中学校区の2倍以上の数値となっている。そのような状況から、「願う姿①」と「願う姿②」を見たとき、特に「願う姿①」の体験的な活動や話し合い活動を通じて、多様な考え方に触れられるような教育が求められているように捉えることができる。

羽島市全体では、「次代の羽島を担う心豊かな子どもの育成」を目指す教育と考えているが、地域や学校によって実情が異なるため、中学校区ごとに「願う姿」のどの部分を目指すのかを考えてもよい。

桑原学園でいうと、今後児童生徒数も減少していく。複式学級の可能性もある状況である。一方で北部の学校では、教室が足りないという話も聞いた。校区の広さも異なる。これを一律同じ方向性で統一するのは難しさがある。今、桑原学園校区のことで話をしたが、それぞれ中学校区の代表が集まっているので、自分の地域で願う姿をイメージした話をするとうい。

【委員】

賛成である。子どもたちのことを考えたとき、義務教育としての公平性や公共性、平等性は確保したい。

羽島市の「強み」に平地で移動しやすいということをあげているが違和感がある。これが「強み」なら、山間部は「弱み」になるのか。市全体が平地ということは、人

が移動しやすいということである。そのうえで、合同授業や合同活動が実現できることが市の強みになる。

アンケートの結果を見ても、中学校区によってかなり違いがある。特に注目したのは、1学級あたりの人数は、どのくらいが適切かという結果である。竹鼻中学校区や中央中学校区は、21人から30人を希望する方が多い一方で、11人から20人を希望する中学校区もある。制度的な問題で簡単に1学級あたりの人数は決められないが、地域や学校区によって意識や考え方に違いがある。校区の違いをもう少し整理していくと、より学校区にあった学校のあり方が見えてくるようになる。

【委員】

平地で移動しやすい点は「強み」かもしれないが、移動しやすいが故に若い世代の流出が多い。交流がしやすいという意味では「強み」である。

【委員】

資料の中にある羽島市の「強み」は、今後の学校のあり方を考えるうえで参考になる。例えば、オンラインの実践が豊富であるという「強み」をいかして、大学生や高校生と交流することも考えられる。オンラインであれば、1人の話を大勢が場所を選ばず聞くことができる。

また、正木小学校の授業を他の小学校でも聞く等、子どもたちにとっても良い刺激が生まれる。

【委員】

現在ある「強み」をさらに強化することも考えられる。例えば、学校間が近く交流が盛んにできそうとか、コミュニティ・スクールの連携・協働を学校区ごとに具体的にすることが考えられる。

【委員】

「願う姿」の1つに、多様性や流動性のある豊かな人間関係がある。特別支援学級、あるいは特別支援学校に在籍する児童生徒との人間関係もそこに含まれる。地域を離れて特別支援学校に通う児童生徒は、地域との繋がりが薄くなりやすい。しかし羽島特別支援学校があることで、地域との繋がりの素地がある。

【委員】

3つの小学校からなる羽島中学校区に住んでいる。1つは大規模校な小学校、2つは小規模な小学校である。こうした状況は、話題になっているように中学校区により状況が異なる。そのことを踏まえて学校のあり方や特色を考える必要がある。

その一方で先生方に極端な負担がかからないような働き方を大切にしなければならない。子どもたちだけでなく、先生方にもこの学校に来たいと思ってもらえるようになるとうい。それが子どもたちや地域にとってもプラスになる。

【委員】

地域や学校の実情が異なるため「強み」をいかすのか、「弱み」を補填するのか、どちらの考え方がよいのかを答えるのは難しい。保護者としては、安心安全な環境のもと教育が受けられることが一番だと考えている。

能登半島地震ではないが、非常時であっても保護者としては、安心安全な環境で早期の教育再開を望んでいる。そのためには、地域コミュニティの活性化が重要になる。

今後、老朽化による学校の建て替えや教育施設の見直しが行われると思うが、その際には、学校施設の中に、コミュニティ・センターが入っているとか、消防団の拠点施設を備えているとか、学校施設の複合化も考えるとよい。そうすることで地域コミュニティの活性化にもつながる。

【委員】

羽島市において学校を選択できる場合は、特定の住所に住んでいる場合と、義務教育学校を選択する場合とある。学校を選択についてこれ以上広げる必要はないと考える。

【委員】

大規模の小学校と小規模の小学校が一緒になる中学校区があるなど、中学校区によって実態が異なる。本会議には地区の代表の方々もいるが、学校運営協議会に参加し、意見を聞いたり、説明したりすることが大事である。

【事務局】

これまで6回に亘って協議をしてきた内容を、まずは、学校運営協議会でも概要を説明したいと考えている。その後、答申案の前になるのか、答申案の後になるのか未定だが、学校運営協議会の方々の意見を聞いていく計画である。

【委員】

羽島市が掲げる「目指す教育」や「願う姿」からもわかるように、キーワードは、中学校区、地域、子どもたちにおける多様性をいかに学校や事務局が受け入れるかである。全員が同質でなければならないというシステムから、多様性を受け入れる包括的なシステムを考えていくとよいのではないか。

そのうえで、子どもや地域の方々、特性のあるの方々など、羽島市の学校に人が集まる形が理想である。

(3) 喫緊の課題に対する進捗状況

事務局から資料を用いて説明を行う。

【委員】

休日文化部活動の地域移行に関して、着実に進んでいると感じた。

不登校の児童生徒への対応という点では、適応指導教室「のぞみ」のように学校の中に置くという発想が本当の意味で多様性を受け入れることにつながる。

【委員】

不登校の子どもたちに対して選択肢を広げていることに感謝している。

魅力ある学校づくりの推進、魅力ある授業づくりには賛成だが、教員の働き方の負担にならないように意識してほしい。

【委員】

先ほど「強み」の中に ICT 機器の活用が取り上げられていた。確かに学習における

ICT 機器の活用は普及してきた。ただ、ICT 機器の管理や修理の依頼書など、授業づくりとは別のところで負担を強いられている。

「楽しい授業づくり」の準備に十分な時間が取れないのが現状である。また、多様化する子どもたちに応えていかなければならない。日中、学校に来られない子は夕方学校に来て1~2時間学習して帰る子もいる。教員はそのあと自分の仕事をするという現状である。抜本的な改革がないと教員の働き方改革は進まない。現場で働いている者からすると机上の空論に聞こえる。

【委員】

一般企業であれば ICT 機器が導入される時は保守点検等を業者に委託している。教育界の場合はすべてを教員が行っているところに問題がある。当然、費用の問題もかかっているだろう。

【委員】

学校現場で働いているが、地域の方の協力には感謝している。それも「強み」の1つである。子どもを育てるなら羽島市に住みたいと言われるよう頑張る必要がある。

【委員】

新たな試みばかりに目が向かいがちだが、羽島市において、〇〇な点は十分に満足できているから、スクラップできるのではないかという視点でも考えていけるとよい。

【事務局】

義務教育の本質と多様性、地域性について教授いただいた。それぞれの学校と地域の「強み」と「弱み」については、各学校運営協議会で教授いただきながら明確にしていきたい。そして市として統一した方向性を示したい。

また、20年後、40年後の教育のあり方を考えるとともに持続可能な学校、教育について審議をお願いしたい。

4 その他

5 閉会